

第二の故郷、 涌谷にたどり着くまで

涌谷町民医療福祉センター センター長 青沼 孝徳（宮城県）

私の医師としての第一歩は、昭和五十三年自治医大の一期生として初期研修のため国立仙台病院（現、仙台医療センター）にお世話になることと始まりました。

この病院は各診療科同士の連携も良くスタッフもおおらかで皆仲良く、出身大学の違いで引け目を感じさせるような雰囲気は皆無でした。この研修時代の出会いが人とのめぐり合いの大切さを教えてくれ、初期研修の重要性を心に刻み付けることとなりました。

我々自治医大出身者は医療に恵まれない医師の足りないところで働くよう義務付けられていたので、全科に対応できるよう今で言うところのプライマリーケア医、総合医になるべく、当時としてはまだ珍しかった

多科ローテーションを基本としたプログラムを希望しました。

二年の初期研修が終わり今度は四百五十床ほどの地域の中核病院外科勤務を二年経て、自治医大の病理学教室に所属し、病理解剖と外科病理として発癌実験を行いました。この後期研修はそれまで外科医として過ごして感じた数々の疑問に答えを出してくれ、実験をすることで多くの論文を読んだり書いたり、また外国を含むいくつかの学会で発表する機会が与えられたことは私の医師人生において極めて有意義でありました。

後期研修後、医師確保困難のため病院から診療所にせざるを得なくなった国保診療所に赴任しました。一人医師で有床診療所はかなり大変

でした。ただ、このような一見苛酷な環境の中でも楽しく充実した思い出しか残っていないのは家族が一緒にいてくれた御蔭だと思えます。いくら大変なこと辛いことがあっても、官舎に帰り玄関で二人の子供たちの小さな靴を見るとまた明日頑張ろうという元気がわいてきたものでした。

二年間の診療所生活が終わろうとしていたとき、涌谷町から新しいスタイルの病院を作りたいので参画してくれないかとの申し出がありました。涌谷の町長さんは病院作りに政治生命を賭ける気概を持ち、これからの地域の病院は医療だけでなく行政が担うべき保健や福祉（介護）にもかかわるべきとの考えを持ち、それを実現してくれる医師を求めていました。いろいろ迷いはありましたが私は涌谷町にお世話になることを決心しました。病理学や発癌の実験はほかの大学の人たちでもかかわる人が沢山いるだろうが、医療資源の乏しい田舎町の要望にこたえていく医師はあまりいないのではないかと考えると、大学設立の趣旨からしても自治医大出身の自分が行かなければと思わずにはいられませんでした。きざな言葉で言えば学問や研究より地域医療への情熱が勝ったと言

えるかもしれません。

昭和六十二年四月、私は多少の不安と大いなる希望を持って涌谷町に赴任し、病院開設準備室勤務となりました。少ないスタッフで全人的医療を展開するにはどうしても臓器別の専門的医療ではなくプライマリーケアを中心とした医療が必要との考えから、Harvard大学の関連病院Cambridge Hospitalに留学しました。英語で話さねばならないストレスはありましたが先進的なアメリカのプライマリーケアを学ぶ機会を得たことはその後の自分にとって大いなる収穫でした。

昭和六十三年十一月二十二日に涌谷町民医療福祉センターが開所されて二十二年、日々実践の場で地域住民にとって大切なこと、必要なことを積み上げてきました。そしてその結果たどり着いた結論が、地域とわりわけ医療に恵まれない地域では効率よりもより質の面からも保健・医療・福祉（介護）の一体的な提供、すなわち地域包括医療・ケアが重要であるということでありました。今後とも医療資源の乏しい地域の人々が安心して、また希望を持って暮らせるよう地域包括医療・ケアの実践と発展に努力してまいりたいと思えます。